きた角太郎「ア、先生お待遠様でございました　左内「イヤこれは大きに御苦勞　角太「實はこの下の灘へいけば酒の良いのもありますけれども、つひこの下の村から買ってきました、幸ひ蛸もありましたから二杯ばかり買ってきました、サア〳〵これで蛸でも湯煮て酢蛸で一杯やりませう　左内「それは結構、茲で先生はその者の宅に滞在することになり、毎日のやうにかの男と代る〴〵山へ登て獣獵をやって居た半年程といふものは何事もなく暮してをったが、茲にその年の十一月に至り、彼の世にも恐ろしき肉猪を近治るといふ事になる。

一二　（摩耶の山中で怪獣退治

さて其年の十一月の四日、朝から雪がチラ〳〵降り出した　角太「先生、今日の雪は夜に入てから積りますから、こんな日に例の獣が出るかも分りませんから、一つやりませうか　左内「サア、行ってみやう、モウ何刻だらう、

角太「先刻なった鐘は午刻でせうから、まだ未刻にはなりますまい　左内「そうか、ぢやアいかう」是れからかの男は例の鐵砲を擔ぎ先生は六尺ばかりあります樫の棒、それを小脇に抱込んで、寒いといってもまだ霜月の上旬、手足の凍へる程でもない、雪が降るのも厭ひなく山路を彼れ是れ十丁ばかり出掛けた、すると先方の森の間でバサ〳〵〳〵といふ音がする、この物音に先方の方をみると、小牛程もあらうといふ獣類が二疋　角太「そりや先生　豫々聞いてをりますのはあれでございます」其所で佐分利は瞳を定めて見ると、毛色は俗にいふ鼠色といふのには少し濃い、そして四足が割合に短い、成程、繪にかいてある一角といふ獣類によく似てゐる、コレハ日本の獣類ではない、どう云ふ譯でこんな所へ外國の獣類が來たもの

であらうかと思ふ間にビユーッと二疋伴つて騙けてくる、此方の荒木は十匁の強藥、覘ひを定めてズドンと一發擊つた、彈丸は外れたとみへてビユーッと獸類は驀進に飛び込んできた、荒木は二度目の彈丸を込めんとしてゐる、今の鳥銃とは違つて兩蠻流の火繩砲、砲をたてゝ込矢をとつて今彈丸をこめてゐるところへ飛び込んできた彼の怪獸類、兩足をかの鐵砲をもつてゐる荒木の肩へかけると同時に頭からガブリ喰い付ゐた、アッといふまもあらばこそ半面食ひ切られて、それへ倒れる奴をなをあさ足らないのか、荒木の身体を引裂いて肩口へ食ひついた、この体をみた佐分利先生棍棒をなげすて腰なる大刀を拔いて怪獸の横手へ廻るとみゐたがかれの丁度腹から上の人間なれば鳩尾といふところを目がけブッーリと突いた、逃しる血汐と共にそれへ倒れるところを乘掛つて打撲つた怪獸は苦しんでそこへ倒れる、これを見てゐたのは牝か牡かは分らぬが、今一疋の

つれの獸類、先方から先生の顏をジッと睨んだ、汝伴合の敵だ思ひ知れともなんともいふまいけれども、再びこれへ飛び込んでくる、心得たりと血の滴る一刀を持つて斬りつける、ピラリ〳〵と二三變飛び懸つたが、この爺さんはなか〳〵強い、コリヤ叶はないと思つたか、それなりでまた元の叢を望んでドシ〳〵駈け出して了つた、此方は血の滴る一刀を持つて生き返つてはならぬと思つたか二度まで刺り廻した上、なほも咽喉の邊りへブッーリ止めを刺した　左内「サア荒木氣を確かに持て」氣を確かに持つも持たぬも、もう息が絶へはてゝなる　内左「オヽ、モウ死んだか可愛相なことを致した」と歎いたがどうも仕方がない、緣あればこそたとへ半年でも同棲をしていた者、獸類のために殺されてみれば甚だ不憫、併し敵討は俺がしてやつた、ところが人間の死骸と怪獸の死骸と二つ、ことに怪獸は牛ほどもある大きな獸、鎗は天下の名人ではあるが、力はそんなにない、

どうもこの二個の死骸を擔いで往く譯にはいかない、どう仕やうかと思つてゐるところへ、柴を擔いだ老爺が三人山から下つてきた、それと見るなり佐分利先生「オイ〳〵　○「へエ　左内「お前達は皆近所の衆だな　○「ハイ私等はこの麓の者でございます、旦那樣は旅のお方ですか　左内「イヤ俺もこの山間に住居をする者ぢや　○「オ、そう云へばこの先方の谷間の獵夫の宅に居らつしやつた旦那樣ぢやアございませんか　左内「オ、俺の顏を知つてゐぬか　○「へエ、貴方のお門を度々通りますから見てをりますハヽア牛ですかこれは　左内「お前さんも知る通り本名はなんといふ怪獸か分らぬが、俗に肉猪といふ怪類、これを私が退治たのぢや　△「へエー豪いことをなさいました、オヤ、これは獵夫の死骸でございますナ、左内「そうだ　△「どうしました　左内「可愛相に到頭肉猪にやられた、この者の妻も聞けば當年の正月十八日に摩耶の觀世音へ參詣をして彼れに

喰れたといふ話である　○「へエー私等もその話は聞いてをりますから摩耶などへは參りません、神樣や佛樣といふものは手を合せて拜むのはなんのためです、惡事災難の遁れますやう、身に災難のないやうにといつて拜むのではございませんか、その觀音樣へお參りをした奴を肉猪の喰ふのを默つて見てゐるといふのは分りません、それだから皆々が猪くひ觀音といひます　左内「なんたそれは　○「イエ、尻喰ひ觀音の洒落てす、それはそうとどうしますかこれを　左内「サア、總て肉食をする獸類は喰へないといふが、どんなものだか俺は喰つてみたいといふ考へである、兎に角荒木の死骸をこの儘捨てゝ置く譯にもいかぬ、どうだお前達柴を擔いでゐて何程の錢になるか知らぬが、柴を持つて歸つて賣るだけの倍なり三層倍なり賃錢は遣る、氣の毒ながら三人でこの獸類の死骸と人間の死骸を、此方の住んで居るところへ持つてきてくれぬか　○「イヤ、宜しうございま

す、何も稼ぎです、私等は柴賣りさばかり定つたことはございません、錢さへ貰へばどんなことでもします、貴方の死骸でも　左内「コレ〳〵俺はまだ生きているよ　○「イエ、モシ旦那が死んだ時には　左内「馬鹿を云へ、

△「どうだ擔いでいてあげやう　二人「ウムよからう」と、三人はこれから傍にある一個の死骸このまゝでは擔いでいけぬ、そこで自分等の柴を縛つてありました縄を解いて、獣類の四足を縛つて人間の身体も首から腰の邊りへ縄をかけ、荷造りができた、そこでこの近傍で適合の木を伐つて、これに通して引擔ぎ彼の谷間の家まで持つて來た　左内「アヽ大きに御苦勞であつた、なほ御苦勞序でに、この向ふに長松寺といふお寺がある、このお寺の和尚に來て貰ふやうに賴んで來てくれ　○「畏りましてございます」田舍の人は親切で、早速お寺へ參つて賴むと坊様かやつて來た、これから代官所へ届けて檢視を受けるといふのも面倒だ、ナニ山中のことだから

構はない、縛死ではあるけれども荒木の死骸を葬ることになつた、先生は肉猪を切つて肉を燒いてたべて見たが美味くない　左内「コリヤ喰へないな　△「旦那様美味相うな香ひで、一つ御馳走になりませうか　左内「イヤいかん　△「ドレ一つ……イイこれよりか豚の方が餘程旨うございます、

左内「そりやア豚の方がうまい、こんな獣類は業をするから、これはいつそ燒いて了はう」そこでこの三人に手傳はして穴を堀つてその中へ投りこんで、薪木を積んで燒くといふことになつた、ところで先生考た　左内「チヨツと待てこの皮が入用だ、皮だけ剝がう」そこで折角投り込んだのを又取り出して全然腹のところからズツと裂いて皮を剝ぎ、肉は埋めて了つたが、この皮皮屋がないから鞣すことはできん、けれどもそのまゝにこれを陰乾に致して乾すことにしたが、これは牝猪であつた、そこで牝を蕞ふといふのは獣類の常であるから、この皮を利用して、もう一疋殘つて

いる猪を打ち取つて了ひたいといふ考へ、三人の者は禮の貫錢をやつて歸し、後に佐分利先生はその年から翌年へかけてやはりこの宅に住つてをつたが、折々はこの山の間をば探してをる、尤も出かける際には牝猪の皮を被つて牡猪を探してゐた、ところが翌年の二月下旬の頃、日和でよいから其皮をか擔いで段々山の奥へ登つたが人通りもない、傍への方に大きな岩がある、その下に穴が少々あいてゐる、先生は右の獣物の皮を被いて、その穴の間に這入り四邊の容子を窺つてをる、かの茨木童子といふ盜人は平井の保昌をつけ狙つた時、牛の皮を被つてゐたといふことがあるが、肉猪の皮を被つて佐分利先生暢氣なものでスヤ〳〵寢込んで了ツた、今日は二月二十五日頗る快晴で暖氣、おりしもドシ〳〵と上ツて參ツたは年齢は漸く二十才格好で、色白くして中背漸く元服をしたばかり、笠を右の手に携へて左の手には扇子をもつて、奥の院へ參詣了り山を下ら

んと、遙かに小手を翳して海原を見てゐる、ところへピユウツといふ音がして遙か裏山の方から飛び來たツたのは例の怪獣肉猪である、かの若武士を望んで矢庭に飛び懸ツて來た、ところが此方の男もさる者、持ツたる笠を傍へに捨て、鉄扇を右の手に取り肉猪を望んで打込まうとするその身の輕さこと宛然飛鳥の如く今しも怪獣面上へ向けて飛び懸ツてこようとする、若武家はヒラリと背後へ飛び退さ、腰なる大刀を拔き打ちに飛び懸ツてくる、肉猪の頭上を目がけて切り込んだ、カチイリといふ物音、是れは角に當ツたのか但しは何れの部に當ツたものか分らんが、カチーリといふ音、宛然石か金に斬り込んだやうな音がした、仕損じたりと若者はまた後ろに飛び下り再び向はうとする、この時居眠てゐた佐分利先生、ヒヨイとみると、若き武家とかの肉猪との立合「此は大變、可愛相にコリヤ若者は獣類のためにやられるわい」と、思ツたから、前半に手挾んでをつ

た短刀に着いてゐた小柄をとッて、獣物を目がけてユーッとなげたる刀は過たず、かの獣類の左の眼中へ命中ッた、これにはさしもの獣類も背後へ蹌踉々々とするところを、得たりとばかりに彼の武家、一刀を取ッて腹を望んでブッ、りと突た、肉猪はよろ〳〵と蹌踉めく間に、又飛び込んでブッり再び突いた爲めにパッタリ獣類はそれへ倒れました、若者はホッと一息を吐いて「ア、恐ろしい悪獣もあるもの」と一刀の血振ひをしながら横合を見ると、岩の間から致しまして佐分利先生、獣類の皮を被てヒョイと現はれた、かの若者は驚いた、しゝの十六疋といふが、まだ出るのかしらん、飛び懸らんとする、此方は佐分利聲を掛け　左内「アイヤ若人はやまり給ふな、待たつしやい」この聲を切つて二度吃驚、油斷はならぬとグッと身構へた、かの皮を後ろへはれ　左内「イヤ若人お手の中感心致した、武家「ヤアさてはお身は人か」と再びあとに退りながら油斷はせん　左内「

イヤ御心配あるな、お身が打ち取つたる誠の獣物、御覽下さいこの皮と同じ獣類でありませう　武家「ハイいかにも左様　左内「實はこの獣類は手前が打つたのでござる、先に拙者がこの牝猪を退治て後、どうかこの牡猪をも打ち取りたいと存じて、牝猪の皮を被つて日々出歩きをりましたが、今日まで出逢ぬことでござつた、然るにお身が首尾よく退治られた、失禮ならお手の中は天晴なことでござるが、まだ獣物などを打ち取りなすつたことがない御容子で、危險に思ましたゆへ、それがため無禮がましうは心得ましたが、御助勢のために手裏劍を打ちました　武家「ハイ　左内「お氣が着きませんか、かれが眼中を御覽あれ　武家「イヤ成程、これはどうも有難うございました、お身の御助勢がなくば獣物のためにやられるところ、誠に御親切に有難うございます　左内「イヤ、御挨拶痛み入る、失禮ながらお若人は劍道御修業でござるか　武家「仰せの通り武術修業に往來を致す者、

左内「ハヽア何方の御藩でござるか　武家「ハイ　私事は紀伊大納言　頼宣の家來笹野權三野と申す者　左内「さては紀州家の御家來で、豫て高田又兵衛御門人といふお噂を承はつたが左樣か　權三「これは御承知下しおかれて甚だ恐縮致たしまする、して御自分樣は何人でゐらつしやいますか、

左内「イヤ、先年又兵衛に面會をした際お話しを承はつたことでござる、手前は佐分利左内といふ者爺でござる　笹三「イヤこれはしたり、何ゆへ先生には斯樣な所に　左内「何分斯る山間でお話しもならぬ、この少々先に詫住居を致してをる、お急ぎでなくばお立より下さらぬか、出來合の粗飯を差あげやう　笹三「それは有難い、それではお住居まで御同道を願ひませう、この猪の皮は　左内「イヤ、さきにはこの猪を退治やうと思つて肉だけは燒きすて　皮は拙者が保存しておいた、モウ今更斯樣な猛獸、害をなすとも益のないもの、谷間へすてる方が宜らうと思ひますは」と小柄を

拔いて殷血を拭ふて鞘に納め、肉猪の身体をその儘谷へ蹴落した、そこで同道の上詫住居へ立歸つて參り、みると中々閑靜な所、内方にはいるとチヨツと机もある、鐵砲もある、何か書類もある樣子、草鞋の紐を解きそれに上つて、まづ更めての挨拶、權三郎は膝を進めながら　權三　先生、御有名の方がいかなる譯で掛る山間に只お一人お住居遊ばしますか、さぞ御不自由でもゐらせられませう、お構ひなくばお話し下し置れまするやう、

左内「イヤお尋れ下されて辱けない、ア、天に風雨の障　地に震動の妨げどうも致し方のないもので、實は國許を浪人を致したいふのは、長谷川大澤のためゆへ、彼れ等兩人を打ち取るはいと易いことではござれども、それも大人氣なし、もしかれの讒言によつて家斷絶をなさば、後々までの耻辱、又花をもたせ、かれがために勝を讓らうものなら、師匠佐分利猪之助先生に申し譯がない、止事を得ず主家を棄てたやうなことであるが、

浪人致した後も親族に預けておいた悴佐一郎は如何成長致しをるか、一應は國許の樣子も聞きたく思ひます、自から參るも未練らしく、只この方角は足守か、備中の國はあの雲の下かと、折々は故郷のことを思ひだすことでござる」と先生國許を浪人した次第を物語つた、笹野權三郎はこれを聞いて權三「ア、ー御有理なる次第でござりまする、拙者もまた中國路を修業に及ぶ身上、足守へ參りましてもし御賢息の御樣子が分りましたら失禮ながら書面をもつて御報知を仕りませうから左内「これはどうも御深情辱なうござる、もしおいでになりましたら、拙者が門人、濱田六郎右衛門を初めとして五六輩は少しは骨ある者もをりますから、どうか御自分のお計ひをもつてお尋れ下されたら相分ることでござりませう權三「イヤそ儀は承知致した、御懸念下さるな、何れ手前もこれから中國筋より九州路を廻る考へでござる、立寄りましたら外ながらお報告申すこと

でござらう」とその夜は有合せの肴で一杯飲んで、高田流の槍術の話しを權三郎がすれば、又は佐分利流は斯樣なことでござると左内先生が話しをする、改めて道具を持つて立合はいでも、モウその道の奥儀を極めた人々ゆへ、彼れ是れと云ふ話しの間にその概略が分つたものとみえて、權三郎も幾分の德を得て悦び、先生も珍しい話しを聞いて悦びながら、軈て床をのべなほも寢物語りをして夜を明かしたが、翌朝食事を濟まし「左樣なれば後日お便りを申すでござらうから」と茲で再會を約して袂を分ち、權三郎は山を下つた。

一三

（攝者は大島伴六でござる）

さて佐分利先生は笹野權三郎の山を下りゆく後姿をうち眺め左内「ア、

ー勇しいことである、若い時分といふものは誰れしも斯く勵んで修業のしたいものである、併し高田は今は小倉にゐるが、あれだけの門人を持つて彼れの名前が上れば流名　盛んに廣まり、嘸ぞ嬉しいことであらう、此方が取立てた門人の中に、我が流名をもつて世に打つて出る程の者はない、まだ老い年とつたといふのではなし、願はくば悴佐一郎だけは流名を穢さぬやうに一人前の武士にしたいものである」と　獨語つゝその日は一日こゝに籠つてゐた、さてこれが二月下旬のことであるが、その翌三月のお節句、先生は衣類も大層汚れてもきたし、久し振りで兵庫へいつて何か着物を一枚求めてこようと、表の戸締りをして山を下つた、丁度三月四日のことで、昨日はお節句だといふ今日、兵庫の町はまだ休んでゐる家もある湊川から兵庫の町をだん〳〵來ると傍へに和田屋といふ呉服屋がある、先生は其家へはいり　左内「許してくれよ　番頭「へエ、おいでなさいまし、

左内「アヽ紬んあれば一二反欲いものだ　番頭「畏りまてございます、これは信州でございまして、又此方は上州でございます、まだ外にもお安いのなら太織紬ですが、この信州紬はお丈夫でございます　左内「ムウそうか　番頭「して御敕は何でございます　左内「紋は桐ちや　番頭「へエー　左内「五三の桐ちやが、黒か檳榔子の極くよい染にして貰ひたい　番頭「畏りました、お羽織とお召物でございますか　左内「アヽさうぢや、どうか染め上つたら仕立ておいて貰ひたい　番頭「畏りました、どこへ持參を致しませう、左内「アヽーチョッと遠いぞ　番頭「そうでございまするか、御遠方なら飛脚にもたしてやります　左内「勿論お前の方の若い衆等か持つてくる譯にはいかん、この邊には町飛脚があるだらう　番頭「へエございます　左内「六甲山の中の谷、途中に地藏が祭つてあるが、その地藏から分れ道になつてゐる、山の中途にある一軒家、そこに此方が一人をる、若し分らんだらあ

の邊に樵夫共が仕事をしてゐるだらうから、尋ねてくれたら大概分る先立て肉猪を退治た老爺だといつて 番頭「へエー……コレ子供お菜をくんでこい……ア、旦那様でございましたか、なんでも劍術の先生で、大層强いお方が獵夫の宅に食客をしてゐらつしやつて、獵夫夫婦が喰ひ殺されたのをそのお方が敵討ちをなさつたといふので、寄ると障るとその評判、永らくの間惡い獸物のために、觀音様へ參詣も絶へてをりましたが、この頃は遠慮なく參詣が出來るといふので、先月初午には私共主人から暇を貰ひ、摩耶へ參詣を致しましたが、甚い賑かなことでございました左様でございますか、イヤ宜しうございます 左内「直段が定つたら書付にしてな寄越して下さい手付を置いて行かうか 番頭「ナニ宜しうございますもう判つて居りますから、出來上りましたら仕立賃と共に御勘定を致して持たしてやります、マアどうぞお菜を召上りまするやう、コレ坊ちやん惡

いことをしていけませんぞ、このお方でございます、猪獸を退治たお方は惡いことをなさると、貴方の首でも何んでもお拔きなさるのです 左内「コレ〳〵 番頭「戯談をいふな 番頭「イエこの位ゐにおどかしておかぬと宅の坊ちやんは惡戯でしやうがございません 左内「ハヽ、大きに邪魔を致した な 番頭「有難うございます」これから和田屋の宅を出てだん〴〵と山へ掛つてくる、今しも摩耶山を横にきれて、近道を六甲山の谷間へ歸らうとすると、山の上から降りて參つた一人の武士、紺緞子の野袴に脊割羽織を着て、深編笠にて面体を包み、服裝は頗る立派だが、浪人とみへて家來はついてをらん、佐分利先生と道を行き違はうといふ時かの武士は笠に手を掛けながらヂイッと傍へ寄つた、佐分利先生も無禮な奴、笠の内から顏を見るとは禮儀を知らぬ奴と思つたが、浪人と思へば咎めもしない、お互ひに七八間も行き過ぎた頃、かの武士は此方をふり返り 武士「アイヤチヨッ

とお止まりを願ひます、それなるお武家、チヨツとお尋れ申しあげます、

左内「ハイお呼び止めになつたのは拙者でござるか　武士「そう、道の挾い山の中、外に往來の人もない、お止め申しのたは拙者、いかにも御自分のことでござる、チヨツとお待ち下さい　左内「ハ、、、ア、何かお尋れでありますかな　武士「失禮ながら御自分はこれから天上寺へ御參詣になるのでございますか　左内「イヤ〳〵左樣ではござらぬ　武士「エー、然らば何方へお出でゞござるか　左内「これは怪しからぬ、まだこれまでお逢ひ申したこともない初見參、いはゞ往來にての出會、その拙者の行き先きをお尋れなさるといふのは……　武士「イヤ失禮ではござるが、少々考ふることがござるからお尋れ申しあげるので、間違つたら御免を蒙る、この谷間とやらにお住居をなさる、劔道か鎗術かの先生にて、先立つてこの山中に於て猛獸をお退治になつたお方があるといふことを先刻茶店の老父

から承はつた、もしやそのお分ではあるまいかと存じ、卒爾ながらお尋れ申したやうな次第、お攜ひなくば御尊名をお名乘りの程を願たい　左内「ハ、、、イヤこれは〳〵いかにもお話しの通り、この山の谷間に住居を致してゐる涙人の獵夫は拙者でござる、先だつて猛獸といふ程ではござらぬが、往來の人妨げをする獸物を退治たことはあります　武士「アゝそうでござるか、これからどこへ　左内「イヤ宅へ歸るのでござる　武士「然らば途中ながらお話しも致しかれます、失禮ではありますがお差支へなくばお住居まで伺ひまして苦しうございますまいか、お尋れ申しあげます　左内「イヤ〳〵それは別段人の住む宅ではない拙者は獨身である、御同道申しても苦しうない　武士「左樣か、然らばどうぞ御同道を願ひます」と件の武士は先生の後からついてくる、老人は先にたつて頓てかの一つ家へ歸つて參つた　左内「サアその懸樋の水で足をお洗ひなさい、手拭雜巾もそこにあ

るから」といひ置いて自分は先に上り、續いてかの武士も足を洗つて上つた、見ると斯る山中ではあるが、なんとなく床しき家の構へ今まで頗る無禮じあつた浪人、大小刀を此方においていと懇懃に兩手を支へ　武士「エヽ誠に途中失禮を致しました、手前は肥後熊本加藤家の臣、當時浪人大島伴六と申す者にございまする、先生は何人にあらつしやいませうか、どうか御尊名を伺ひたい　左内「ハイ左樣か、曾てお名前を承はつたこともある、お身が大島氏でござつたか、イヤ誠に前乘るも耻しいが、手前は中國浪人佐分利左内と申す者　伴六「イヤこれはしたり、御高名は雷の如く承はりましたが、緣なくしてお目通りも致しません、只今までの無禮の數々平にお赦しの程を願ひます　左内「イヤ拙者も大きに御無禮を致しました、存ぜぬことでお互ひに無禮はまづ御容赦に預りたい、サアどうかうち寛いで、モウ夕景にも近い、何も御馳走はないが今晩は御一泊なさい、またお話しも伺ひたい　伴六「有難うございます、實は拙者から願ふところでございました、御老人のお手を煩はしません、何か相當の御用がありますれば……　左内「イヤ〳〵何もございらぬ、食がる物もそこに吊した干魚が四五本、米だけは少々蓄へておきました、アマ兎も角も私はこれから夕饗の支度をしませう　伴六「左樣なれば拙者お手傳ひを……　左内「いや〳〵返つて邪魔である、一人住みなれてをる、サア私は飲まぬが煙草をお喫りならそこに燧具もある、今火を拵らへるから」と磊落な先生でぼつ〳〵御飯の拵へに掛つた、程なくできた、何か肴が五六尾屋根裏につるしてあるのを下しまして圍爐で燒いて　左内「どうぢや酒は飲るか　伴六「ハイ左内「少しは召飲るだらう　伴六「エヽ少しも參りません　左内「ハヽアぢやア皆無いかんか　伴六「イヤ實は頂けば四五升は頂戴します　左内「イヤこれは驚いた、四五升とは感心ですな　伴六「ですから都合によりますと頂戴

しません、失禮ながらお蓄へは、左内「これは〳〵檢めてから飲むさは驚いた、成程このほゞ灘の方から送つて貰つたのが、今晩一晩お身の飲る位はあるだらう……オヽある〳〵、これは上方の半樽と名づけて二斗ばかりある、大分のんだが、ボテン〳〵と音がしてゐる、まだ五六升はある、拙者も一升位はやりますが、お身のお相手はできぬ、勝手にお飲りなさい、冷酒がよいか燗酒にしやうか、お心任せに私は燗をしてやるから」と二合ばかりはいる燗器の中に酒をいれて、藥罐の中につけて、鬪をしてゐる、伴六先生佐分利の顔見てゐたが、面白い老爺さんだと思ひながら自分で「それでは私は冷酒で頂戴しませう　左内「ムヲ其方がよい」彼是れするうちに氣取つて飲むのではないから口程でもない、二三升程飲むと　伴六「アヽー結構、流石は津の國は酒の本元、灘ときてい頗る結構です、アー大きに心持よくなりました、モウ十分頂きました、これより御飯を頂戴し

ませう」酒をすませ、飯を四五椀たべて、食事が終ると　伴六「御自分樣のお身上もお尋ね申しあげたいが、拙者は御承知の通り主家斷絶を致しましてからは浪人の身上となりましたのは至當の話し、御自分はかの備中に御仕官の身上でおありなすつたが、何故木下家を御浪人をなすつたのでございますか　左内「いやそれを問はれるのには誠に困る、まづ老人に失策があつたから浪人をしたと、もうこれだけでお答へは御免を蒙りたい」何事もいはずに老人の失策から浪人をしたといふだけのお答へには、何か深長の意味がありそうだから、伴六は　伴六「いや分りました、強てお尋ねは致しません、私も大分諸方を廻りましたが、ごうもこれといふ先生にもお目に懸つたこともない、久振りで大先生にお目に懸り、この位嬉しいことはございません、どうか先生御流名のお話しを今晩お草臥れとあれば明朝でもお話しに預りたいことでございます　左内「いや〳〵拙者は唯先師に

敎はつた佐分利流といふものを汚すまいといふので、ほんの實直にやつてたりましたとのみで、いはゞ師の半言にも至らぬ、私が流名だけはどうぞ廣めたいといふだけは熱心であつたが、お身方からお尋ねに預つては斯樣なものでござるとお話しをするやうなことはできぬ、されども大島氏貴公は、九州で名高きお方、仰せの通り主家斷絶とは申しながら、再び仕官をなさるの御所存か、また道場を開いて門人を集めるといふお心か、他に望みあつて諸國を往來なさるものか、物が反對になつてすみませんが老人の今晩の樂み、どうか御自分の御履歷伺ひたいものである」と先方に尋れに掛つた奴が、却つて反對に物を尋ねられるといふやうなことで、大島伴六顏を改めて　伴六「こは御老体恐縮の至り、然らば拙者が今日までの來歷一　茲で大島伴六は主家浪人から今日までのいろ〳〵と面白い長物語りがある。

一四

（貴樣の槍は誰に敎はつた）

ソモこの大島伴六のその系圖からといふと、豐臣秀吉の臣、肥後熊本の城主加藤清正の家來にて二百石を頂いた大島伴左衛門といふ人の悴が即ちこの伴六吉綱である、この伴左衛門の家内が、始終病身勝で子供がない、どうぞ致して子供ができたならばと、始終神佛に念じてをつたが何うしてもできない、すると宅に使つてゐる下女のお梅といふ者、顏は下女のことで餘り美くないが、誠に優い女で、主人夫婦によく仕へてをる、奥方とも中はよいからお梅や〳〵といつて可愛かつてゐる、ある夏のことお梅は肌をぬいで類りに庭の掃除をしてゐた、伴左衛門は裏口の戸があいてゐるからヒヨイとみると下女が大肌股ぎで庭の掃除をしてゐた、この女

の肌といふのは優いもので　伴左「お梅や　梅「オヤ旦那様御免遊はして」と肩をいれやうとすると　伴左「待て〳〵肩をいれるには及ばん　梅「イエ餘り熱いので失禮を致しました、御免下さいまし　伴左「イヤ誰しも熱い時分は有勝のこと、チヨツとこゝへ〳〵こいヤ肌をぬいでこい　梅「貴方御串談を仰しやいまして　伴左「串談ちやない　梅「旦那貴方マア……　伴左「ハヽア中々美しい　梅「オヤマア貴方お弄りなすつては嫌でございます　伴左「お前は何才になるざいます、モウお婆さん　伴左「何才になる　梅「モウ貴方二十才になりますす　伴左「二十才でお婆さんか、二十才位は女の盛りではないか、してお前の親父は何をしてゐる　梅「百姓でございまして　伴左「ムヽウ、兄がありのぢやな　梅「左様でございます、兄が二人ございまして、妾は三番目の末子で、嫁入りするには行儀作法をしられはならぬから、何所へ奉分をす

るが宜らうといふので、久兵衛さんへ話しを致しましたら、幸ひお敷でおいて下さるとのことで、御奉公に上りましたが、つひ田舍育ちでございまして、旦那様や奥様がゐらつしやらぬと肌などをぬぎまして誠にすみません、御勘辨遊ばして下さいます　左左「イヤよい〳〵、今日は妻女もをらぬがお前に相談がある、主のいふことは家來がきくものであらう　梅「それがお父さん　申しました、御主人のいふことは何でもきくのが家來だ、お武家といふ者は主公様のために生命をすてるものだと申しました　伴左「ウム、それはよいことを聞いてゐる、實は奥さはモウ八年もそうてゐる、三年居を同じうして子なき時は去るといふ、八年たつてもまだ子ができないが別に妻女に不都合がないから離縁をするといふ譯にはいかぬ、よく彼れは女として私を大切にしてくれるから少しも罪がない、けれども元俺の宅も相當の家柄だ、今では加藤様に仕へて二百石の祿を頂いて家を興したこ

とであるが、さうぞこの家を潰しともない、私の心算養子を貰らうたつてそれでは他人の物、どうか我が子が一人欲いものだ、俺もおひ年よつたといふでもない、外妾をおくといふことも、何も自分の弄みばかりではない、子を儲けやうといふ心算で、今汝を見ると乳もよい、身体も丈夫だ、お前なら子ができるであらうと思ふ、それに就て其方に相談をするのだ、どうぢやたとへ小身者でも女房になりたい、妾如き者にはならないといふのなら俺が強て頼む譯ではないが、どうぢや相談にのつてくれることができますいか」是を聞いてお梅は眞赤な顔をして、さし俯向き　梅「旦那様どうぞその儀は御勘辨を願ひます　伴左「いやか　梅「いやといふ譯ではございませがん、親父が申しました、御奉公にあげるのは行儀を教へにやるのだ、親の許さぬ夫を持つやうなことがあつたなら、親子の縁は切り七生までの勘當だと申しました、親父に勘當をされまして、死んだるお

母さんのお位牌にもすみません　伴左「いやこれは感心だ、その志しは誠に悦ばしい、それでは何かお前の親父が承知をすればお前は得心か　梅「それは親父さへ承知を致しましたら、此樣な醜い者でございますが、奥樣が御承知の上なれば搆ひませんから、どうぞ奥樣と親父とに御相談を下さいますやう　伴左「ア、よい了簡だ、益々私はお前が氣にいつた　お梅は赤い顔をして臺所の方へ逃げ歸つて了つた、ところがその日の夕景に奥さんが歸つてきた　奥方「只今歸りました　伴左「オ、、奥歸つたか、アゝお前に相談があるのだ　奥方「ハイ更まりまして何の御用で　伴左「外でもない、お前と私と八年そうてをるれ　奥方「オヤマア可笑いことを仰しやいます、妾が參りましてから、左樣でございます八年になります　伴左「ところが俺と二人の仲に子供がない、子なきは去るといふけれども、私はお前と永年の間いひ爭ひをしたこともない、仲の好い夫婦である離縁をすると

いふ譯にはいかない、そこで私も妾をおかうと思ふ、けれども、妾奉公に來ようといふやうなものは、皆がさうでもあるまいが十中の八九は莫連者、左樣な者を妾においたところが小かできぬや分らん、いろ〳〵私も考へてをつたところが今日お前の留守の間にお梅がおぬいで庭の掃除をしてゐた」これを聞いて奥樣は可笑くなつて笑つてをりましたが奥方「マア左樣でございますか伴左「中々よい門ちや、乳もよい乳ちや、私は醫者ではなゐが、小林と心安いからチヨイ〳〵出ていつて、乳母の乳などをみて貰ひにくるのを見たが、かういふ乳はよい質だといふことは聞いてをる、それに就いてあのお梅の肌の客子をみるに、どうやら彼れは子ができるやうに思ふから、どうぢや此方の妾にならんかと相談をした、すると奥さんと親父さへ承知をすれば仰せに從はぬこともなゐといふ、其所でマアお前に相談をするのだが、親父に相談をしたつても妙なもので、何所でも

女房といふ者情氣をしない者はないからお前は遠慮をするだらう、でお前からお梅の親父をよびにやつて、一遍相談をしてみてくれ、その代り彼ば妾、お前は本妻、決してかれの色香に迷ふといふのではないといふことをお前は承知をして貰ひたい　奥方「ハイそれはマア結構でございます、それなれば妾は大きに悦びます、梅なれば妾とは意氣もあつてをりますから妹のやうに思ふてやりませう」茲で夫婦の相談は調ひ、その晩親許へ使をやることになつた、親父の六兵衛は至つて物堅い百姓、よい身代ではないが、田地の一町も持てゐる、食ふに困らぬ百姓、娘の主人から使ひがきたといふので、着物を着替へ羽織を引かけてやつて參り　六兵「エ、今日は伴左「オ、六兵衛、サア此方へ上つてくれ　六兵「昨晩は忠兵衛殿お使ひでございまして、何か至急に御用があるとのこと、どんな御用でございますか、旦那樣にも奥樣にも御機嫌宜しうございますか、毎度お梅が御贔

になりまして有難うございます、誠に田舎育ちの行儀なしでございますから、お目倦い事もございませうが、どうぞモウ一二年はお屋敷において頂きたいと考へてをります　伴左「イヤそれに就ては話しがある、今日お前をよびに遣たのは私から話しも何とやら、彼方に家内かをるから、家内にあつて聞いてくれ　六兵「アー左様でございますか……エー奥様今日は、御機嫌宜しうございます　奥方「オヽ六兵衛どん、サア此方へ　六兵「エヽ、不調法者をお世話を下さいまして有難うございます　奥方「よくあれは働いてくれますので妾は悦んでをります、お前忙しいところをよく來てくれました　アノ、お梅や、お父さんがみへたからお茶をくんでおいで　梅「ハイ」と　お梅おは茶をくんで持てまゐりました　梅「お父さんおいでなさいまし、　六兵「オヽお梅、イヨー太つたな、結構な御膳を頂いてゐるから身体が段々太る、大きなお尻だな　梅「アレマアお父さん彼様ことを仰しやる」と

お梅は笑ひながら次ぎの室へ出てゆく、後で奥方は六兵衛に向ひ　奥方「實は六兵衛どん、相談といふは他でもないが、あのお梅を妾に下さるといふ譯にはいくまいか　六兵「へエー、あの娘をお入用でございますか　奥方「サア私はあの娘を欲いと思ふ、少し望みがある　六兵「へエー何かお望みが、　奥方「サアあの娘の乳が妾は望みだ　六兵「乳が、そりやア奥様御免蒙りませう、豚は尻を斬つて置いても、一月たちやア肉が出來ますが、乳瘤などを病つて乳を斬つたこともございますが、生てる者の乳を切りとるといふやうなことは、どうかその儀ばかりは御勘辨を願ひます　奥方「何を云つてるのだね、實は他ぢやアないが、お前私の云ふこと承知してはくれまいか　六兵「それは娘の御主人でございますから、私の方に及びまする事は、何事でも承知致しますが、出來ぬ事はお斷りを申さればなりませんがなんでございます　奥方「お前は子供が三人あると云つたれ　六兵「左様でご

ざいます、兄が二人ございまして、未子があのお梅でございます　奥方「ど
うせあの娘は嫁にやるのだらうね　六兵「へエ、彼様不器用な生れでだれも
貰ひ手もございますまいが、割鍋に閉蓋といふから、相當なところに縁が
ございましたら、マア長持を一棹位、こしらへてやらうといふ考へを致して
をりまする　奥方「それについて誠にいひ難いんだが、縦へ宅に遣つてゐる
仲間でも若黨でも、女房にやつてくれと云ふのなら、私は媒介をしてやる
が、そう云ふ譯でもないから私もいひ難いんだ　六兵「へエーごう致します
る　奥方「實はね恥しい事だが、私は御當家へきてから今年で八年、まだ子
供がない、それに就て旦那様は色々御心配をなさる、私と旦那様と仲が悪
いといふのではないから、離縁をなされると云ふ譯にもいかぬが、子がな
いとしてみると後が困る、旦那様だつて段々年をおとりなさるし、今の
うちに丈夫な女なら子もできる、けれども旦那様がお年をお取りなすつた

なら子胤も盡るといふやうな事になるであらう、それで今の間に妾を一人
置きたいと思ひ、色々心配をしたけれども、詰り妾奉公にでも上らう
といふ者は、女郎の果てか、多くの客取りをしたやうな者で、只マア男を
悦ばせるだけを業のやうにしてゐるのだから、子のできるといふのは難
しいそこでお前の娘を瑾物にするやうだが、旦那様の妾にして貰ひたい、
それで態々呼びにやつたのだが、どうだらう六兵衛どん、承知をしてくれ
ましたら、表向町人とは違つて武士の家、私を離縁といふことにはい
かぬが、内實は彼は女房私は隱居、あの娘とは姉妹同様にしてあげま
す、どうぞ折り入つての頼みであるが、承知をして貰ひたい一これを聞い
て親父の六兵衛ポロ〳〵涙を流し　六兵「エ、奥様、御親切に有難うござい
ます、彼様な醜ない女郎を、誰れが貰つてくれる者もあるまいと思ひま
したが、旦那様がその思召しで奥様が御承知とあれば結構でございます、

私に何の否やがございませう、お梅茲へこいよ……何ちやそんな大きな尻を盛たて　奥方「サアその大きなお尻といふにつけても、身体が丈夫であるから小兒ができるだらうと思ひます、どうぞ何分宜しく頼みます」とのことで、そこで娘にも云ひきかせ、漸う茲で親父も承知を致した、お午飯を御馳走になつて親父の六兵衛は村へ立ち歸つて了つた、そこで先づ云はゞその晩は婚禮　奥方「ウアお梅や湯にもお這入りよ、髪を結つてお化粧をして、旦那様のところへ行くんだ」と妹が娘を嫁にやるやうな氣で世話をしてゐる、其日は宅は大笑ひ、妙なもので、この女は體格がよいから忽ちの間に姙娠となつた、サアかうなると伴左衛門は大悦び、どうぞ丈夫の兒の産れるやうにと、食物萬端注意をしてゐる、その内に臨月となつて、オギヤアと産れたのが男の子、そこで上へのお届けは梅の呼とは云へんから妻女の子と云ふことにして宮參りもすみ、親類首め近所組合

への祝もすみ、まづお梅を乳母として乳をのまして育てることになつた、伴左衛門の伴とかのお梅の父に當る六兵衛の六をとつて伴六と名をつけたこのお梅の父は至つて達者で風邪一つ感冒た事もないといふ丈夫な男、その名を貰つておいたなら太きによからうといふので、斯くはつけたのだ、さて成長は早いもので伴六は早や五六才になつた、恐ろしい壯健な者で、男の子は母に似るのは運が強い、女の子は父親に似るのは運が強いと云ふ丁度伴六は伴左衛門よりは母親の方によく似てゐる骨格　壯健、十二三才にもなるモウ世間の子供の十五六の身体は十分ある、劍術の稽古軍學の稽古と勵んで教へることになつた、然るにある日の事　佛參をしてのかへる途次　子供が多く集つて遊んでゐる、何をするかと思ふとなんの木だか分らんが、まづ楠か栴檀と思ふやうな太い枯木であつて、その枝から俵を吊して、それを大勢の小兒がポンとつくと、ユラ〳〵ッと動いて戻

つてくる奴をまた突く、中には俵の戻つてくるのに中つて顚轉る奴もあ
る、當年十四になる伴六、この樣子を熟とみて居たが　伴六「これは面白い
俺も一つやつてみよう　○「坊らやん土俵ですから、これが當ると痛うご
ざいます、およしなさい　伴六「イヤ一つやつて見やう」着物をぬいで裸体
になつて、大小刀衣類を片傍において、百姓や町人の子供と同じやうに
右の俵を向方へポンとおすと、その跳反しがピユーツと戻つてくる、また
ポンと向方へ突く、又戻つてくる奴を突く、三遍程やると集つてゐた子供
は「ヤア坊ちやん豪い方だ恐ろしい力だ、豪いものですな」と皆々驚い
てゐる伴六は二間ばかりある竿竹を持つてきてポンと突いた、突くと一旦
は先方へ行たがその跳逃りがビユーとくる、又突く、暫時の間突いてゐる
うちに、何を感じたか伴六は「ムトウ、これはよい事を覺ゐた、イヤ大き
に有難う」と云ひながら竿を捨てゝ、紙入の中から小粒を出して　伴六「お

前等は俺のためにお師匠さんだ、これで餅でも買つて喰べてくれ　○「イ
ヤお坊さん大きに有難うございます」外の子供等は禮を云つてゐる、伴六
は着物を着て支度をなし、其儘宅へ歸つてきた、玄關から上つてくるの
を見てゐる伴左衛門　伴六、お前頭をどうした砂だらけだ、何か悪戯を
してゐたのか　老六「お父さん私は稽古をしてゐました　伴左「稽古、何の稽
古、今日お前は寺へ云つたのではないか、寺參りの歸りに稽古をする奴が
あるものか　伴六「お父さん私は一つ槍を稽古をしたいと思ひます　伴六「槍
の稽古、わが御前は名代の槍をお使ひなさる、片鎌槍とつては日本に名
代の槍、貴樣は槍を誰に敎はつた　伴六「俵に敎はりました　伴左「ムトウ田
原さん、あの人は弓の名人たが槍をお使ひなさる事はしらなかつた、それ
は結構、道場でもあるか　伴六「イエ枯木でございます　伴左「枯木とはなん
だ　伴六「イエ田原さんではないので、私の師匠は俵で、士俵でございます

伴左「薩張り分らん、土俵で稽古をするのは相撲だ　伴六「實はれ今お寺から歸つて參りますること、百姓の小兒や町人の小兒が集りまして、あの大きな木がございます、お寺の此方の方は　伴左「ウムある、大きな物だ、あれは栴檀の木だ　伴六「あの太い枝から繩を吊して俵がつッてあります、それをドシ〳〵小兒が押て稽古をしてをりまする、私は面白いと思ひましたから裸体になつてはしてみましたが、それは四斗俵ではございません、小さくしてありますがマア米俵に致しましたら二斗もはいる位な俵ですが、砂ですから米よりは重い、四斗俵位の目方はございませう　伴左「ムウ　伴六「それをポンといつて、今度跳返つてくるのを手でおして見て考へました、幸ひ側の竿でよつてみました、成程槍の稽古はお師匠樣をもつよりか、これで稽古をした方が宜らうと私は考へました、で今日のお師匠樣は俵でございます　伴左「ハヽアそうか、それは宜らう、槍の稽古

をするなら先生もある、したいと思ふなら稽古をするがよい、が然し御曹子牛若丸は鞍馬山の東光坊舍那王と仰しやつて、御修業中增上ケ谷でお稽古をなすつた、これを世の人は天狗に敎はつたとか何たとかいふが、全くは獨特の稽古だ、その後鬼一法眼の許で軍學を學び、色々御修業の後天晴源氏の大將となられ、その法を學ぶといふことはせにやならんけれども、自分の流名を編み出すといふのは、本人の考へにある事で稽古をするならば小倉飯田邊りは皆槍術の出來る人だお前の好む所へ稽古にやつてもよい　伴六「有難うございます、お父さん私は師匠さまは持ちますまい、獨身でやつて見ませう、他人さんに敎はりますは所謂るその人の弟子で粕をなめるやうなもので、それよりは自分が勉強して、自分ながらにその術を學び得ましたならば、人樣に遠慮には及ばぬといふ考へです、どうか今日から槍の稽古をお許し下さるやう」と親の許しを受けて裏の廣庭

に稽古場を造つて、日々稽古に掛る、遂に伴六は茲に獨特の一流を極めるのお話しとなる。

一五

石は動かぬが人間は動くぞ

さて伴六は裏へ柱を二本たてゝ、眞中に棒を横に取つけ、丁度鳥居の樣な物を拵へて、その横木へ士俵を吊して、團穂つきの槍を持つて稽古に掛つたのが、そも稽古の初まりである、撓まづ屈せず日々やつてゐる、終ひには力のある物をつくのではないといふので、横槌のやうな物、或ひは小さな石塊を苧縄で縛つて、上から吊るしておく、そうしてこの槌なり石に向つてポン〳〵つく稽古を致した、槍はつくよりも引く方が肝腎で、戰場の槍は撲く物だといふかの後藤又兵衛でも加藤清正でも槍をもつて搗つたの

が多かつたさふい、夫れ等はまづ戰場の働き、一人と一人との勝負に槍で搗くなんといふことはない、伴六はだん〳〵勵んで槍の術を編み出しました、がまだ間を相手についたことはない、たれか相手があるならばと考へてゐるところへ　口「アヽ大島お宅でござるか」とはいつて來た一人の老人伴左「イヤ、これは〳〵水田氏、何方へおいでになりました　水田「アヽチョッと御家老のお屋敷まで參りました、門前を通りましたからお尋ねを致さうと存じてくるとお庭が奇麗に掃除ができ、あいてをりましたから裏口から這入つて參りました　伴左「それは〳〵マアお上りなさい、イヤ相變らず穢い庭で　水田「ハアー、妙なものができてをりますな、なんです是れは、鳥居の細長い樣なものが眞中に横槌や石がつるしてある、また俵がつるしてあるが、なんの呪なひでです　伴左「呪ひでわない、悴が槍の稽古を致しますので　水田「ヘエー御子息か　伴左「サア面白い奴です、自分の子で

すから他人にはいへませんが、貴方とは親族同様お心安いからお話しを致しますが、かれは一つ槍術を案み出さうといふので、頻りにやつて居りますが、一運御覧なさい、妙です、あのつるしてある俵などは盲目がついたつて突けますけれども、アノ小さな石を御覧なさい、碁石の親方みたやうなものが、つるしてありませう、アレをヒヨイツとついて今度戻る時に突き返しますか、外れません、私は此頃みてゐる前でやりますがなか〳〵弓を引いてゐるよりは面白い　水田「左様か、それでは拝見を願ひたい　伴左「お安い御用で、コレ伴六はゐるか　家來「ハイ今廣瀬様の方へまいりました　伴左「そうか、今素讀にゆきましたさうで、もう歸りませう　水田「感心だなアごうも、武藝を勵んでゐてやはりお學問もなさるとは　伴左「少し學びませんければと思ひまして、廣瀬の御厄介に毎日参りまする、モウ歸りませう」これからお茶を飲んでゐるところへ　伴六「ハイお父様只

今歸りました、小父さんゐらつしやいませ　伴左「オイ伴六、今日はなんだつて　伴六「ハイ今日は先生のお講義がございまして、拝聽いたしました、　水田「ムウ、なんの講義であつた　伴六「今日は論語の講義でありました、　水田「そうかそれは結構、勵んで勉強しなさい　伴六「有難うございます、　水田「今お父さんから聞いたが、槍の稽古をしてゐるさうで、一つやつて見せんか　伴六「イエ小父さん一向まだ……　水田「イヤ大層親父が面白さうにいつてゐる、一つやつてみせてくれ　伴左「コノ伴六　水田の小父さんにやつてお目にかけろ　伴六「ハイそれぢやア御免なさいまし」とすぐに庭へとんでをりると、襷をかけ股立をとりあげ、物置からもつてきた二間柄の團穂付の槍、ビユーツ〳〵、ビユツ〳〵と扱いたが、自然と備はるものか、体がチヤアンと極つてゐる、水田源兵衛はこれを見て感心をした　源兵「イヤ旨いなコリヤポンとつくと小い石がポシと跳反る、先方からく

る間に睨つておいてポンと團穂付の槍で突く、その間に横槌をつけはポンと跳反る、次ぎに俵を突く、三つ吊るしてあるのを突いてはまた槍を繰り戻し、三つの釣下つてあるのを彼方此方と代る〳〵稍少時ついてゐたが一つとして外れない　伴六「お目止りますればチョッと休息　源兵「何をいふ……ハ、ア中々旨いなどうも、どうだ俺が一つ相手にならうか　伴六「小父さん貴方は槍をお遣ひなさいますか　源兵「コレ失禮なことをいふな、俺も戰場を往來して、敵の首の五ッや六ッは取つた者だ、石をつくのと人間を突くのとは違ふぞ、小父さんが一ッ向ッてやる、モウ團穂付の槍はないか　伴六「澤山ありますからどれなりとよいのをお使ひなさい」そこで稽古槍をもつて水田源兵衛「サア伴六殿、遠慮はない突て來なさい　伴六「宜しうございますか、私は人間を突いたことはないのです、今日初めてゞすから貴方をも石や俵と同じやうに突きますぞ、石や俵と同樣に思はれて堪るか

石や俵は動かんが人は動くぞ、よいか貴樣をつくぞ　伴六「宜しうございます、おいでなさい」左右に分れて互ひに繰りいだす槍、カチーリ〳〵四五合ばかりもうち合せてゐる間に　伴六「小父さん御免」と子供ながらも考へがある、胸をついて怪我をさせてはいかん、顏を突いてはなほいけない、いろ〳〵考へて水田源兵衛の左の向脛を、かの俵と心得てついたから堪らない、痛いッ」といひなら眞仰向けにドサアリ顚倒ッた　伴六「小父さんお怪我はございませんか　源兵「まて、オ、痛い〳〵、煙にも食はさぬ向脛、甚い目に遭せをつた」父親の伴左衛門はとんでをりて　伴左「コレ水を持ってこい　源兵「なに大丈夫、生命に別條はないけれども、ア、痛かつた恐ひしい酷い奴だ、成程これはなか〳〵よく使ふ、併しながら死物と活物とは違ふぞ、サアもう負けない大丈夫だ、モウ一本こい」流石は戰場をふんだ武士、顚倒つたつて驚かない、また立ち上つて　源兵「此度は足はい

かんぞ　伴六「それでは咽を　源兵「咽などはなほいかん、兩方の手はなら搆はないぞ　伴六「ちやア小父さん手を支きますぞ　源兵「ヨシ肩や手なれば大丈夫　伴六「宜しうございますか、ちやア肩にしませう、右でございますか左でございますか　源兵「生意氣なことをいふな何方でもよい　伴六「それでは左右共に左を先きに右を後に、二つ一時に突きますぞ　源兵「馬鹿を云へ此方は水田、飯田先生の方で槍は少しは習つてある、サアこい來れ」とくり出してくる奴をビューッと扱いてきた早業　伴六「ソレ左りソレ右」と云ひながら二つポン〳〵と肩をついた、今度は倒れないが小手が痛くなつたか槍を投げ捨て　源兵「ア、まて〳〵恐ろしい方だ、これなればやれる、豪い者ができたな、伴左衛門殿お仕合せだ、實に大島家ことはよい子が出來た、お目出度ござる」と水田は這々の体で立ち歸つたが、その晩から足と肩が痛くつて、翌日から出仕が出來ない、病氣と云つて寢てをる、三日も

登城をしない、伴左衛門は心配して水田の宅へ見舞に來た　伴左「どうなつた　源助「サア御子息はやられて悦んでゐる、決して恨まぬ、あれだけにできれば結搆だ、御殿へ往つたところが坐ることが出來ない、兩手を支いて挨拶が出來ないから困つてゐる」身体を見ると黄藥の粉を酢で解いて熱をさるがために貼つてある、もの〻一周間もたつと全快した、伴左衛門も悴の腕並に感心してゐた、然るに慶長の十七年六月十七日、主君清正公は德川家の計畧に掛つて、毒饅頭を召し上がつて遂にお逝去になつたげれども家名には變りはない、子息主計頭清廣殿御相續の後、德川二代將軍の思召しを持つて、忠の一字を給はいて忠廣と名前が代り、七十五万石の主人である、成程體格は大きい、力もあるが、父君とは大變な違ひで、所謂暗君でお芝居狂言では、八陣の八ツ目に「我が本城へ我なから、心おく露ふみ分て」などゝ優しい前髪姿で歸つてくる、すると羅

絹といふ女がきて口説などがあつて、大層綺麗な若殿に拵へてあるが、忠廣殿は至つて不縹緻、その上好色家で亂暴で、四十二人の妾を置いた、これがために心ある武士は、加藤家の滅亡近きにあらうといふので、忠臣の家來はだん〳〵御意見を申し上げたが更にお用ゐがない、剩さへ德川を倒さうといふ考へから、日本一丸といふ一万石積みの軍艦を造つた位ゐこれ等を首め十三ケ條といふ簡條によつて、遂に加藤のお家は斷絶をするやうなことになつた、加藤家の斷絶で一時に數多涙人が出來た、中に大島伴左衛門は奥方は先に亡くなり、今では妾のお梅と悴の伴六を連れてこの國を出立、天草島に渡つた、それから忽ちの間に父は病氣のために亡くなる間もなく生の親お梅もなくなつた、二個の儉骸はこの天草島に葬つた、伴六は熟々考へた「ア、世の中に不幸な人は幾らもあるが、主家は斷絶、父母には別れ、世の中に味方といふは我れ一人、昔しの豪傑は一

身の外に味方なしと云ひなすつたのは實に我等のこと、これは人を頼みにするものでない、これから世の中に出て大島の家名をあげ、天晴れ世間に譽れを殘さう」とそこで天草島を後になし、まわり廻つて肥後の國佐賀郡三十六万石鍋島公のお城下へ掛つて來たのが秋の九月のこと、丁度日暮れ御城下の旅籠町に掛り、みると熊本屋といふ行燈が付いてある、その宿の戸口より　伴六「許せよ　○「これはお早うございます　伴六「一人じや泊て貰へやうか　○「結構でございます、コレ、洗足をもつてこい」下女は盥に水を汲んで　下女「どうぞお洗ひ遊ばせ」そこで伴六は足を洗つて座敷に通る、餘りよい旅籠屋でもない樣子　下女「旦那樣お湯があいてをりますからおはゐりなさいませ　伴六「アヽそうか、ぢやア湯にいれて貰はう」そこで着物をぬぎすて湯に這入り湯から上つてくると　下女「アノ御酒は如何でございます　伴六「ムヲ少しは飲む、一合二合では面倒だ、五合づゝ二

度燗をしてくれ、それから上は呑まぬ、何にか一鉢肴を拵へてきてくれやろう下女「畏りました」暫らくすると酒肴を持てきた、一升の酒を飲んで下女に給仕をさせ御飯を食べ終りお茶を呑んでゐると、戸外の方に當りワーッといふ聲「喧嘩だ〳〵〳〵」とワイ〳〵騒いでをる、餘り大勢が騒ぐから、伴六は戸口に來つて見ると若い者が三人、もう六十にも餘る老爺踏み倒してゐる、禿頭には少々血が流れヒイ〳〵いつて悲鳴を上げてゐる、周圍をとりまき山の如くに見物をしてゐる者はあるが、たれ一人仲裁をする者もない、素より義を思ふ伴六は素足で飛んでおりて「コリヤまてッ」振り返つて見ると大髻の武士であるから、老爺を打つ手をやめて妙な顔をして此方をみてゐる　伴六「コレどうしたのだ、どういふ譯かはしらんが、みれば相手は老人ではないか、何ゆゑかれを打つのぢや　△「エ、旦那太い畜生です、この野郎は　伴六「どうしたんだ　△「へエ、コリ

ヤアこの向ふになります按摩でございます　伴六「何按摩だ　△「へエ、私處は米屋でございますが、初めの間に彼奴が一升二升と小買をしてゐるうちに、米を貸てやつたのです、ところが三年も住んでゐるものゝことですから、一升や二升では面倒であらうと思ひまして、米を一斗かしてやつたのが初めでございます、すると一度に一斗づゝもつていきます、錢は五升振り拂つたり、六升振り拂つたり、始終殘り〳〵になりまして、今のところで米になほしてみると八斗餘りかしになつてをりまする、代を取りにいきますと、初めの間は己が儲ける錢を二百でも三百で貰ひましたが、又後の月から三月の間一文も錢は拂ひません、今日も出てきて、どうぞモウ一斗送つてくれといふ、それは米は送らん事もないが、前のを拂つて先繰り貸てくれといふのなら、一斗や二斗の米なら貸ておいてやりますけれども、八斗以上といふ米を貸してそれを拂はないで今日もきて一斗貸せと云

ふから、貸せないといひますと、言草を吐しやアがるのです、餘り癪に障るからなぐると、此奴がにげだした、後から追かけてきて、餘り生意氣な奴ですからいひぶつたのです　伴六「成程その米代を拂はぬのが惡い、がお前はこの者を撲殺してどうする、この人を殺したからといつてお前さこの米代がとれるものぢやない、そんな酷いことをせぬがよい、八斗の米代は何程だ　△「へエ……　伴六「イヤヘエぢやない、何程だ　△「そりや米といふものは高い時と安い時があります、時々價が違ふのです、八斗二升の勘定は宙では覺えてをりません　伴六「それでは勘定をしてい、米代は俺が拂つてやる　△「ぢやア貴方はこの老爺の親類ですか　伴六「親類でも何でもないのだが四海は兄弟といつて、世の中は見んな親類も同樣だ、

△「へエ　伴六「拂ひたくつてもない時は拂へない、この者も肌に倒さうといふ心算ではあるまい、米八斗のために人間の命をとるといふのは酷い

この後はそんなことをいふな　△「へエ、して貴方は何方でございます、

伴六「イヤ名前をいつたところが貴樣には分らぬ、併し名前のない者から米代を拂つて貰つたとあつては安心ができまい、俺は肥後の浪人大島伴といふ者だ、俺が拂つてやる、受取をして判を押してもつてこい、俺はこゝに泊つてをる、サア老爺さん此方へ上らつしやい　老人「誠にどうも……

伴六「ハア見れば大分老体だい、お前も惡いぢやないか、外の物は儉約をしても米の儉約ができない、生命を繋ぐ第一の品、その米代を拂はぬといふことがあるか併しそれも貧乏で拂へれば仕方がない、人間には病氣災難といふこともあつて、かりを返せぬといふことはある例ひだ、なんとか斷りの仕樣もあるべき筈、マア此方へ下らつしやい、これ足が汚れてゐる足を拭いてやれ一先程よりの伴六の取計ひに亭主も女中も感心をして居たが亭主「サア老爺さん此方へお上り　老人「有難うございます」これから足を

洗はせ、自分の居りまする座敷へ連れて參りましたが　伴六「アノ御膳ができたら二人前もつてきてくれ、頭の傷はどうぢや……ウムほんの微傷だ、どこかこの邊に藥屋があらうから藥をかつて來てやりなさい、玉子の生があるなら一個もつておいで」そこで頭の傷を手拭でふいて玉子の白味をつけてやつた　伴六「サア暫時辛抱してゐなさいといつてるところへ　女中「アノこれは金創の膏藥でございます」さもつてきた、それを頭へはつてやり　伴六「サア痛むだらうが直に癒るであらう、御膳を喰べなさい　老人「ハイお見受け申しますれば、まだ若くてゐらつしやいますが、御親切の段は有難うございます、アヽーどうも貴方のやうなお方のお世話にならうとは心得ませなんだ、全く手前が惡うございました　伴六「惡いといふことに氣がついたらそれでよい、往來中でぶたれるといふことは隨分見苦しい譯で、ものいひ格好總ての樣子が尋常の按摩ちやアあるまい、按摩をするから

にはお醫者さんの零落のはてか」と尋ねられてかの老人はホロリと涙に暮れ　老人「誠に面目次第もありません、私の生れは大和國添上郡芦屋村といふところの鄕士、中岡半太夫の悴前名は善次郎と申したものでございます、幼年の頃はひから武藝がすきで、武藝修業の後奈良の寶藏院に參り、寶藏院胤榮先生からかの寶藏院の片鎌槍といふのを學びまして、槍をもつて名をあけやうと存じ、實は先生から許しまでうけたのでありますが、その後大阪へ參り大阪の山村といふ醫者の娘と緣を結び養子になりましたが、大阪で少々放蕩致しまして、折角の養家を潰して了ひましたのも酒ゆへで、その養家の女房には死別れ、廻り廻つてこのところまで參りまして摩摩渡世、相變らず酒を飲みます、それゆへ始終今日にも追れまして、酒代の方は拂ひましても米代の方は拂ひません、去年から一年越しに借りましたのが、あの通り八斗餘りにもなりまして、今日も酒を飲

んでなりまして米を一斗だけ貸してくれと申しましたら、お前は酒を飲んでゐるではないかといはれ、酒を飲むのは私の勝手だと申しましたら、勝手に酒を呑むなれば酒だけ飲んでをれ、米代を拂ふまでは米は送らぬといはれ、私も醉つてをりましたからつひ言葉に花が咲いて此樣な譯になつたので、なに年を取つておりましても、彼樣な町人の二人や三人は打すゐることはしつて居りまするけれども、ものをかりて返さぬ上、先方の者を毆つたぶつたといつては、いひ譯がないから辛抱してをりましたが、誠に耻しい譯でございます」これをきいた伴六は「ハヽア、ぢやアお前はその養家の名を繼いでゐなさるのか、元の名前か　老人一養家を潰しまして誠に申し譯がないので、今ではやはり中岡善次郎といふ名前でをります　伴六「フムそれは感心だ、よし、及ばずながら私の力の及ぶだけは世話をしてあげやう、酒が好きなら飲んでもよい、もうお前は六十以上、今夜はこゝに

お泊りなさい、就てはお前さんの今のお話しに、胤榮先生の許しを受けたといふが、その免許狀といふのはどんなものであるか、私も實は槍術を好む者ぢやが見せては貰へまいか一と茲で大島伴六がこの中岡善次郎の持つて居る寶藏院流槍術の免許を見て自得悟入して大島流を發明するといふ話からそれより普く天下を遊歷して佐分利左内や梅田杢之丞等槍術の大家に出會ひ、遂には、三代將軍家光公の御前に於て一代名譽の三槍家が御前大試合の話となるのであるが、そは『槍術三傑傳』と題して刊行する龜口隆文館から發行することになつて居る。

槍術名人

佐分利左内（終）

大正三年十一月十四日印刷
大正三年十一月十九日發行

佐分利左内
花鳥叢書 10

著作者　隆文館編輯部

發行者　大阪市南區鰻谷仲之町二百二十四番屋敷　樋口源次郎

印刷者　大阪市西區新町北通一丁目五十番地　河上貞次郎

著作權所有

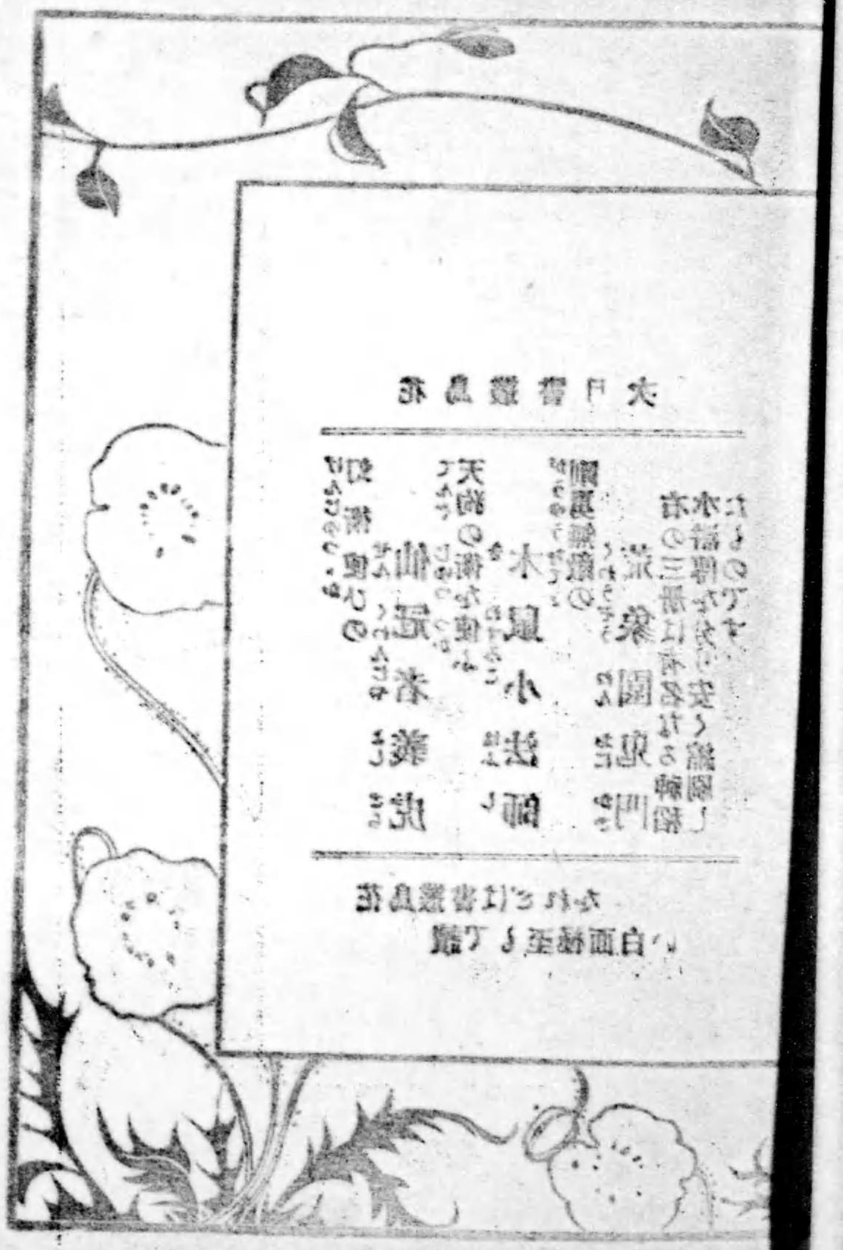
【定價金貳拾五錢】

發賣元　樋口隆文館
大阪市南區三休橋鰻谷南へ入西側
振替口座（大阪八七九七）

花鳥叢書目次

幻術使ひの
仙冠者　義虎
天狗の術を使ふ
木鼠小法師
剛勇無敵の
荒象園鬼門
右の三冊は有名なる神稲水滸傳を分り安く縮刷したものです

花鳥叢書はどれを讀でも至極面白い



大日本雄辯會講談社
白面郎王子の鬼

278
11

花鳥叢書目次

幻術使ひの **仙冠者** 義虎
天狗の術を使ふ **木鼠小法師**
剛勇無敵の **荒象園鬼門**
右の三冊は有名なる神稲水滸傳を分り安く縮刷したものです

花鳥叢書はどれを
讀でも至極面白い

花鳥叢書目次

小松三勇士
諸岡一羽齋
幽霊半之亟
野州惡狐塚由來
庚申山
劍士浪花百人斬
越船

花鳥叢書はどれを
讀でも至極面白い

終

《10》